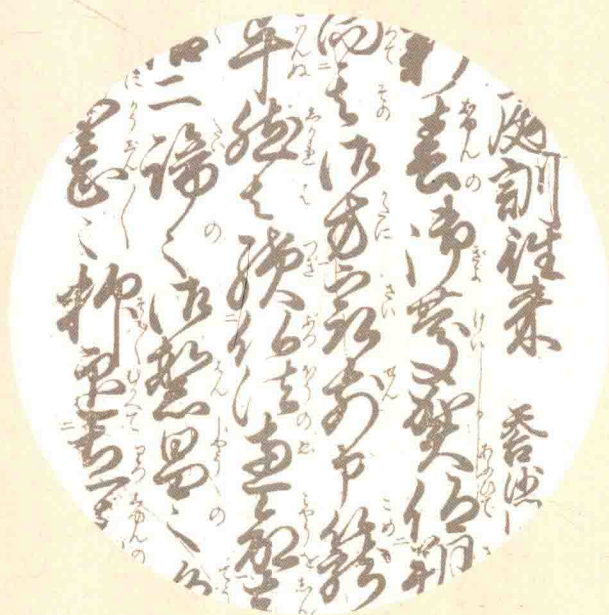


新撰遊覽往來

翻字・訓読・索引

◎ 具香 著



NORTHEAST NORMAL UNIVERSITY PRESS
WWW.NENUP.COM

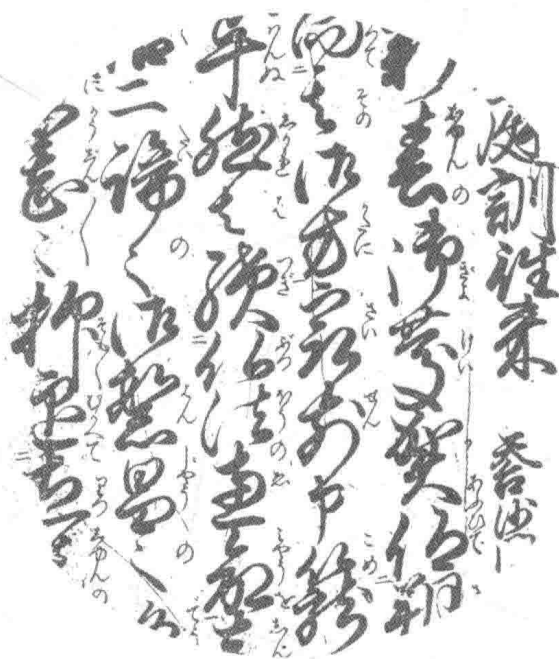
东北师范大学出版社

2018

新撰遊覽往來

翻字・訓読・索引

◎ 具香 著



NORTHEAST NORMAL UNIVERSITY PRESS

WWW.NNUP.COM

东北师范大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

新撰游觉往来: 翻字·训读·索引 / 具香著. -- 长春:
东北师范大学出版社, 2018.2
ISBN 978-7-5681-4240-3

I. ①新… II. ①具… III. ①书信—文化研究—日本—近代
IV. ①I313.076

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2018) 第 044550 号

0138

☐ 策划编辑: 王春彦

☐ 责任编辑: 卢永康

☐ 封面设计: 优盛文化

☐ 责任校对: 房晓伟

☐ 责任印制: 张允豪

东北师范大学出版社出版发行
长春市净月经济开发区金街 118 号 (邮编: 130117)

销售热线: 0431-84568036

传真: 0431-84568036

网址: <http://www.nenup.com>

电子函件: sdcbs@mail.jl.cn

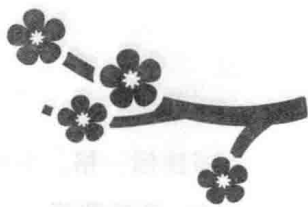
河北优盛文化传播有限公司装帧排版

三河市华晨印务有限公司

2018 年 5 月第 1 版 2018 年 5 月第 1 次印刷

幅画尺寸: 185mm×260mm 印张: 19.5 字数: 497 千

定价: 70.00 元



序一

我国的日本汉学研究历史悠久，但是，打开局面还是晚近的事情。进入 21 世纪后，随着一批又一批训练有素、学养丰富且有留东背景的青年学者的加盟，此学日渐兴隆，最终呈现荦荦大观之势。中国期刊网上检索到的论文逐年增多，专门论著亦越来越多，而且研究的深度与广度在逐渐提升。具香博士的新著《新撰遊覚往来 翻字・訓読・索引》一书就是这些成果中出类拔萃者。

具香博士自 2006 年春，开始负笈东瀛，先后留学东京学艺大学和二松舍大学，攻读硕士、博士学位，2014 年春学成，获得文学博士学位，之后，在二松舍大学担任为期一年的助教工作，最终于 2015 年 9 月归国任教，就职于惠州学院外国语学院日语系。

多年来，具香博士一直潜心于日本汉学研究，其中，用力最勤者当数“往来物”研究。自 2008 年春开始攻读日本文学专业博士学位之际起，她便励精图治，锐意投身于此项研究。同时，她长期跟踪学术前沿“往来物”研究的动态，转益多师，切磋琢磨；学而弥深，思而弥敏；日积月累，厚积薄发，终达致研学，用心血浇灌出学术之花，结出科学的果实，通过本书的内容可以读出笔者的部分重要成果。

众所周知，所谓“往来物”，原本是日本教育学领域的一个概念，指自中古至近代初期编撰的初等教育用教科书的总称。有关“往来物”的分类、历史，以及诸种版本的收集、介绍等方面的研究，构成了该领域的基础研究内涵。从宏观上看，它属于日本汉学研究范畴。经冈村金太郎、石川谦、石川松太郎、小泉吉永等先贤的推进，已取得较大进展。具有代表性的“往来物”善本的影印、翻刻及其刊行工作亦次第展开。如今，有关单个“往来物”的文本批评，或就文本中所收录的语汇、表达展开的实证主义性质的调查研究，已经具备了认识论与方法论等方面的条件，研究环境也相当理想。

然而，迄今为止有关“往来物”的研究大多流域文化史、教育史层面的评价与探究，而基于日语语言学见地的研究，即围绕“往来物”本文中文字、表记等维度所开展的日语语言学角度的研究，以及聚焦本文收录语所进行的语义学视角的考察却十分欠缺，甚至没有形成基本气候。

但是，令人欣慰的是，具香博士新著《新撰遊覚往来 翻字・訓読・索引》一书的问世，可谓下了一场及时雨，为几欲干涸的“往来物”本文语言学研究园地浇注了丰沛的清泉之水。



此书独标一格，专门聚焦于“往来物”中的代表性文本《新撰游觉往来》，钩沉探赜，考镜源流，以版本学为利器，缮制出首例《翻字本文》、《训读》以及《索引》，并给出合乎学理的阐释，填补了此项研究的空白。

著者之所以挑选《新撰游觉往来》为具体研究对象，是因为该文本在日本传统“古往来物”传承史上比较受关注，其内容随着时代的变迁，亦在不断地增加、充实、取舍，是一个变动不居，常变常新的文本，难以静态地全面把握。因此，至今尚无人从学术研究高度予以问津。可见，开展此项研究无先行经验与成果值得借鉴，难度自然是大的。尽管如此，著者不畏艰难，本着求真、求质、求是、求实的态度，踏踏实实地推进着这项颇具学科史意义的研究活动。

此项研究的重点与难点是显而易见的。《新撰游觉往来》在日本向来被视作贵重书，文本难以获取，甚至许多人不知有此书流布，所以，具香氏新作中采用的本文就具有珍贵的文献史料价值。著者采用了世人鲜知的江户时代版本的影印本，从年代来看最为晚近，本文内容亦最为全面且纯熟，是较为理想的研究标的。然而，该版本本文佶屈聱牙，古涩难解，是其弊端。为了让读者能够轻而易举地研读，作者下大气力，就本文收录语词汇作了大量释义、考据作业，以《索引》方式附录书后，读者可以随时查证。尽管开展该项作业需要花费大量时间与精力，但是整个考据过程却无暇在书中一一描述，是一憾也。

如前所述，具香氏此著有志于另辟蹊径，把日本“往来物”研究向前推进一步，故其研究明显不同于既往的同类成果。是一部基于日本语言学见地的著作。具言之，属于立足于语义学的、有关“往来物”本文文字与表記的基础研究。

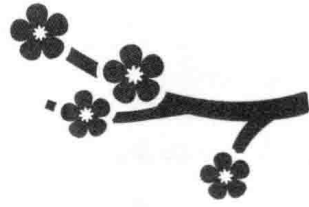
首先，此书全文照录江户时代版本的影印本，以最直接的方式让我国学界了解日本“往来物”代表性文本《新撰游觉往来》的本来面目。其次，缮制《汉字索引》与《自立语索引》，目的在于方便读者随时查证本文中的词汇与文字表記，为读者进行江户时代语言研究提供便利条件。最后，为了便于读者通读晦涩难懂的全文，理解其意义与价值，作者特意附录了《训读》，此举的目的是帮助读者开展江户时代文化史研究。

有鉴于此，本人相信，此书的刊行能够为我国研究者、教育工作者了解日本“往来物”的内涵与实际状况提供直接的便利，也能够为推动国内的日本汉学研究及日本传统教育研究作出应有的贡献。

是为序。

广东外语外贸大学教授 文学博士
陈多友

丁酉年十二月初八于听云斋



序二

往来物とは、日本の中古から近代初頭にかけて編纂された、初等教育用教科書の総称である。往来物の分類・歴史研究、及び、諸本の蒐集・紹介を初めとする基礎的研究は、岡村金太郎、石川謙、石川松太郎、小泉吉永等の諸氏により、大いなる進展を見た。主要な往来物の善本の影印・翻刻の刊行も相次いで行われてきた。現在、個々の往来物の本文批判、或いは所収語に関する調査を志すならば、その研究環境は、ほぼ整っている状況であると言って良い。しかしながら、日本語学的な見地からの研究、即ち、往来物本文の文字・表記に関する日本語学的研究、及び、所収語の意味論的研究は、いまだ十分な成果があげられているとは言い難い。

具香さんは、東京学芸大学大学院修士課程国語教育専攻日本語学コースの院生として、鋭意、往来物研究に精励し、『新撰遊覚往来』の江戸時代版本の本文について、その所収語・表記に関する、極めて精緻な調査分析を行った。具香さんの修士論文は、審査委員全員から賞讃され、学界に公開するに足る内容であると、高く評価された。具香さんは、帰国後も、多忙な毎日の中で時間を作り、『新撰遊覚往来』の古写本の本文調査を続け、更に研究を進めてきた。

今回、その研究成果の一部を、一書に纏める運びになったことは、修士時代の指導教員であった私にとっても、誠に嬉しい慶事である。この本の刊行により、日本の往来物の内容と実態について、中国の研究者・教育者等、多くの識者の知るところとなれば、望外の喜びである。

高橋久子

東京学芸大学教授

2017年11月28日





前書き

「往来物」というと、『明衡往来』『庭訓往来』などの、往復書簡の形態をとった手紙の模範文例集の総称を指すのである。「往来物」は平安後期から明治初期にかけて初歩教育に用いられた手本であるが、特に、近世に入って飛躍的に発展した。この時期の「往来物」には、新しく作られたものと、中古・中世の「古往来」が刊本化され普及したものがある。特に、「往来物」は江戸時代に入ると、寺子屋教育で読み書きの教材に採用され、急速に多種刊行されるようになった。

『新撰遊覚往来』は「古往来」の一種で、往復一組の書状を一二ヶ月に配した二四通の手紙からなる往来物である。その二四通の書状は、当時の社会生活に必要な語彙・語句を数多く列記し、内容は遊戯・喫茶・香・学文・習字・和歌・連歌・管絃・仏事など多岐にわたる。また、月々に中心的話題が設定され、その話題を巡っての質問に続いて回答・解説がなされるという形をとる。

『新撰遊覚往来』は中世に作られた往来物であると言われているが、作者は明らかではない。この往来については既に室町時代に知られていて、古写本の状況から、室町末期には高野山・比叡山・法隆寺など、様々な場で読まれたことが分かる。その後、近世になって刊本化され、広く普及した。江戸時代に刊行されたものに、寛文二年の刊行本二種（安田十兵衛版本と袋屋十良兵衛版本）と無刊記本二種（柏原屋佐兵衛版本と菊屋利兵衛版本）が知られているが、いずれも同じ版本を使用している。この事実は、『新撰遊覚往来』がその版本を再利用し、更には再々利用するという出版書肆が現れることによって、少なくとも数百部は刊行され、普及した事を物語っている。また、群書類従本におさめられていることからもある程度に流布し、利用されていたと考えられる。このように、『新撰遊覚往来』は教科書の歴史の中で広く使われた。特に、江戸時代の教科書としてよく使われたのである。

本書では、近世に出版された『新撰遊覚往来』の版本の影印を紹介し、翻字本文、訓読と索引を作成し載せる。謙堂文庫蔵柏原屋佐兵衛版を底本として用いる。この本は、内題は「続庭訓往来」、作者は「玄恵」、刊年は不明となっており、『往来物大系』一一巻に所収されている。形態は一冊、

全七四丁、毎半葉六行になっている。本文は漢字全体に平仮名のルビと返り点を付している。

『新撰遊覚往来』は日本の貴重書とも扱われ、本文入手が難しいため、その本自体について知らない人が多い。拙著は、まず影印を載せることで、中国の学界に日本の往来物に属する『新撰遊覚往来』とは、どういうものであるか紹介することができると思う。そして「漢字索引」と「自立語索引」は本書の語彙・文字表記の調査を可能にし、江戸時代の言語研究に便宜を図らんとしたものである。「訓読」はいささか難解な本書の全体的理解と通読を可能にし、江戸時代の文化史研究に資することを目的としたものである。

この本の刊行により、日本の「往来物」の内容と実態について、中国の研究者・教育者等、多くの識者に知って頂きたい。





目次

影印	1
翻字本文	39
訓読	77
漢字索引	115
自立語索引	220
参考文献	302
后记	303

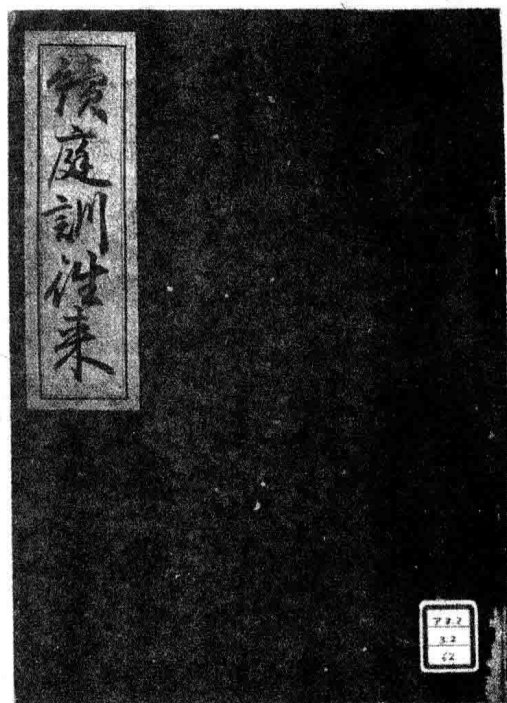


影印

影印凡例

- 一、『往来物大系』十一卷による。
- 一、形態は一冊、全七四丁、每半葉六行になっている。
- 一、本文は漢字全体に平仮名のルビと返り点を付している。

續庭訓往來 卷之四 書法
 新嘉坡 寄 實 伯 明 日
 向 以 來 亦 有 中 外 之 別
 早 晚 之 別 亦 有 中 外 之 別
 俗 二 端 亦 有 中 外 之 別
 咸 知 其 理 抑 亦 有 中 外 之 別



平 生 幸 勿 失 此 秋 分
 隆 冬 之 際 亦 有 中 外 之 別
 秋 分 之 際 亦 有 中 外 之 別
 隆 冬 之 際 亦 有 中 外 之 別
 隆 冬 之 際 亦 有 中 外 之 別
 隆 冬 之 際 亦 有 中 外 之 別

由 德 神 法 亦 一 可 句 之
 主 亦 有 中 外 之 別
 兒 童 亦 有 中 外 之 別
 年 必 有 中 外 之 別
 亦 有 中 外 之 別
 亦 有 中 外 之 別

永結善緣日未久
中下之存念法之隆
多福益紙面之盛
修護心

正月十日

律師明書

此書寫寺法經卷

此年涉事忙迫方
蒙望之方院之禮
在年自他殊重之
志為一之注梵之
其月之來法之
自出度之乃以抄

氣神之力法之
定平代靜之
名之為之
下之為之
天熱一之
而之

定福回信之
其秋也者之
物之為之
我之懷德意
路之為之
之為之

夕名草名木名鳥名
 昔古夕暮昨日平
 西夕立村面茂木枯
 濕家朝月夕月三
 月梅鴈今日

古柳
 春風
 秋風
 月
 物
 花
 水
 國
 陸

生物
 月
 風
 水
 物
 山
 花
 月
 水
 物
 山
 花
 月

生
 物
 月
 風
 水
 物
 山
 花
 月
 水
 物
 山
 花
 月

傳云誰知春細雨
 式目録云見知也
 新編

望^{うんや}宇^う津^ち彦^{えんぶ}部^トも^もも^も法^{はう}彦^{えんぶ}
 其^{その}の^のら^らい^いど^どま^まう^うけ^けま^まう^うて^てい^いん^ん

承蒙 伯父 叔父 事 一向 尊
 漢 之 教 以 也 然 故 亦 重
 以 操 調 和 而 亦 能 定 矣
 則 乘 之 正 以 宣 其 風
 而 好 好 之 故 非 尋 常 之
 烟 葉 善 之 味 亦 甚 矣

[illegible]

望者

古今集々女老千九千九
延壽之年四月五日卒
碓礪天宮勅御書所
紀貫之大内記紀友則
前甲斐同久内府恒
右衛門府生吉生忠參

お撰之る多し能く
貫之る名紀傳に
文萬家集等後撰
集より母を
首村天會御代に
是月於照陽金別

當院人少御伊
能宣法衣名福源
紅阿又坂より
撰集より二十
三百一十首長
中花山院より

拾遺より二十
年白河院より
通後撰全集集
卷六百四十四
羽
羽院勅天治元
朝後撰朝花集

卷依崇徳院天
集より母を文治
白河院より入道
卿撰より新古今
元久之依鳥羽院

通員有家雅經宣家
隆不撰之是号ハ代集
之乃新物撰之貞永元
年依ハ堀河院之作
之亦ハ撰ハ決ハ撰
建長二年ハ撰ハ撰院

仍為家卿撰之續古今
同涉代又永二年ハ撰
九采同大基家号為為
家仍為光俊ハ撰也續拾
之建治三年依ハ懸山院
作為氏卿撰之新ハ撰

嘉元年中依ハ撰多院
作之為ハ撰之如ハ撰
之代集之ハ撰集延
之為ハ撰ハ伏見院之
為ハ撰ハ撰千載集
正和六年ハ撰ハ撰

多院作之為ハ撰ハ撰
撰之ハ撰ハ撰院作
氏部之為藤初撰之為
之為ハ撰ハ撰ハ撰
之為ハ撰ハ撰ハ撰
之為ハ撰ハ撰ハ撰
之為ハ撰ハ撰ハ撰
之為ハ撰ハ撰ハ撰